

学位論文題名

教典になった宗教

学位論文内容の要旨

序論では、本論文の主旨・目的が論じられる。宗教は従来しばしば主知主義的に理解され、思想・教説と同一視されてきた。そして教義や教説の目に見える形になったものが教典だと見なされた。確かに、教典が宗教現象を構成する重要な要因であることには疑問の余地はないし、それが思想内容の点からも研究されねばならないのは言うまでもない。しかし宗教の現実のあり方をみると、教典の意味・位置づけ・機能はさまざまである。たとえば、イスラムではクルアーンは朗読されるという儀礼行為に用いられ、仏教の經典も看經・読經・諷經・写經等の用いられ方によって異なる機能を果たしている。こうした教典の意義や機能の問題は、教典の思想的研究と同様に重要な問題のはずであるが、従来の宗教研究においてはいわば忘れ去られた研究課題になっている。本論文は、この教典論の意義・課題・具体的成果を可能な限り広範な領域に視野を及ぼして明らかにしようと試みる。

第一部は、四つの章に分かれる。第一章では、宗教学の創始者の一人であり、東洋諸宗教の教典を『東方聖典』として翻訳編纂したF・マックス・ミュラーの教典概念を問い、そこに見られる教典論への志向を明らかにする。彼によれば、教典の本質は教説にあるのではなく、教説の差異を越えた共通の根源にある。それは、あらゆる宗教の基礎である「無限なるものへの直観」である。この共通の基礎のゆえに、さまざまな宗教の教説が相対化され、教典の意義も相対化される。こうしたミュラーの教典観は、啓蒙主義的な自然的宗教の見方を反映しており、その点での批判は免れないとしても、教典論の萌芽的な問題意識を有していたことが指摘される。

第二章は、聖書学の新しい潮流が教典論を課題として提起していることを論ずる。歴史的・批判的聖書研究は、聖書をその伝承過程に即してとらえ、聖書全体が多様な要素を抱え込んでいることを明らかにした。この認識は、内容的統一を前提とする正典(canon)観念に対する疑問につながった。近年の聖書学は、文芸学と社会学の諸理論・方法を取り入れつつ、聖書の正典性を一層突き崩し、聖書を文学と見る広い地平を開いていった。この可能性は原理的には従来も指摘されてはいたが、新しい諸理論がその現実化への道を開きつつあるのである。

第三章は、前章の議論を受け、レトリック批評、受容美学、文学社会学等が聖書学に与えたインパクトを検討する。伝統的な教典理解をやや図式的に述べれば、教典とは特定の宗教体験から形成され、同一の体験を再生産する規範となる。しかし、テキストと読者との動的な相互作用を問題とする新しい諸理論は、こうした教典観を必然的に変える。時とともに宗教体験も変化し、それに応じて教典の受けとめ方も変わってくる。教典は、不変

の教義を表現するものではなく、むしろ将来に向かって宗教集団の新しいアイデンティティを作り出す契機となる、と主張される。

第四章は、世俗化・ファンダメンタリズム・グローバリゼーションという三つの現象が教典を媒介にどのような関連を有しているかを考察する。急激な世俗化の中で、宗教集団がアイデンティティを喪失する危機感をもったことが、ファンダメンタリズムの根本動機である。それは伝統としての教典に固執することによって、現状に対する反発を表す。この現象のそれぞれは特定文化内の運動であるが、類似の運動が広く認められグローバルな文化現象となっている。しかし一口にファンダメンタリズムといっても、個別に見ると、プロテスタンティズム、ユダヤ、イスラムのそれは比較的明確な教典の輪郭を有するだけに共通性も高いが、ヒンドゥー、シーク教、上座部仏教などでは教典に依拠するファンダメンタリズムというイメージとは距離がある。こうして、教典との関わりという点から見ると、ファンダメンタリズム概念そのものの再考が必要になってくるのである。

以上が第一部の概要であり、ここで示された問題意識が第二部では具体的素材を手がかりに展開される。したがって第二部は、教典論の具体的事例研究である。このうち、第一章と第二章では、新約聖書のうちから福音書と書簡を取り上げ、教典論の視点から見て明らかになってくることを展開している。

まず福音書に関しては、記者たちの編集の意図を問題とする。イエスに関する諸伝承はやがて福音書に結実していき、それはキリスト教の中核として新約聖書の中へ取り込まれるが、福音書の形成過程で働いたのは、史実を記録するという動機ではない。福音書はむしろ、史実を越えてイエス・キリストの出来事を語り、しかもその記述には、多様な解釈の余地を残すような表現法が用いられている。たとえば福音書記者が共通して記しているイエスの多くの譬えは、それを読む者あるいは語る者の想像力に大きな可能性を残す表現法である。ここでは教典は、宗教のアイデンティティを固定する働きというより、ダイナミックにそれを開いてゆく動力として機能しているのである。

次に、第二章では牧会書簡が扱われる。新約聖書の中心は真正パウロ書簡であるが、それがキリスト教の中核を形成していったのは、受容者の主体的・創造的な関わりを促す「不確定性」が存在したからである。ここで、パウロの不確定性が牧会書簡の特質を生み出したという仮説が提起される。牧会書簡の著者の主観的意識では、パウロに倣うことによって自らの個人的また集団的アイデンティティを保持しようとしているのであるが、著者が生きている社会的・文化的場がすでに変化しているため、模倣を志しつつも無自覚的にパウロからずれてゆく。そしてこのような牧会書簡自体がさらに、初期教会を開かれたアイデンティティ形成へと方向づけるのである。

第一部は教典論のいわば理論編であり、第二部がその事例研究に当たるが、第三部はやや趣を異にしている。ここでは、20世紀最大の新約聖書学者として知られるR・ブルトマンの業績に含まれている諸契機を教典論という新しい角度から掘り起こそうとする。

第一章では、ブルトマンの宗教理解・キリスト教理解が取り上げられ、第二・三章では、第一章の議論が「新約聖書の世界像は神話的世界像である」というブルトマンの命題、およびそれと関連した彼の非神話化論、さらにはハイデガーの影響を受けた彼の「哲学」を検討・評価するという形で論じられる。さらに第四章では、ブルトマンにおける「レトリック」の契機が掘り起こされる。要するに、第三部で試みられた検討の結果によれば、ブ

ルトマンは、単なる新約聖書学者にとどまることなく、教典論へ向かう志向を有していたが、キリスト教神学者としての自己規制から、いわゆる「ケリュグマ」に固執し、教典論にまで踏み込むことはなかったのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宇都宮 輝 夫

副 査 教 授 藤 井 教 公

副 査 教 授 坂 井 昭 宏

学 位 論 文 題 名

教典になった宗教

本論文の元になっている既出論文は、それぞれが自己完結した独立の論文である。今回それらがまとめられて一冊の本の形にされたが、それが厳密な意味で著者の目指す教典論（＝宗教における教典の意義と機能の探求）になっているとは必ずしも言い難いところがある。しかしこれは決して悪い意味にとられてはならない。これまでの著者の研究経過は、著者自身が教典論という「忘れ去られた研究領域」を当初は自らも自覚せずに、しかし徐々にそれを意識化していった歩みに対応しているからである。かくして本書は、教典論という宗教学の新しい領域での成果であるとともに、そもそも教典論という研究領域の存在自体と重要性を明確に言語化した仕事でもある。

ヨーロッパで今世紀から本格化した歴史的・批判的聖書研究は、膨大な蓄積があるものの、著者の指摘する問題意識を展開するに至らなかった。確かに先駆的な研究者が、ある時は文学理論を、あるいはレトリック批評を、またある時には知識社会学や社会史研究を聖書学に持ち込んできた。しかしほとんどの研究者が陥った陥穽は、それらの方法を聖書の思想内容の解釈や歴史的背景の解明に向けて用いたことである。これは、西洋文化圏における聖書研究がいかに強く伝統的キリスト教の価値観に拘束されていたかということの証左でもある。これに対して、著者は同じ方法を用いたとしても、宗教生活の中での教典の機能や用いられ方に着目している。つまり、目指す方向が当初から異なるのである。今から振り返れば、著者の着眼は、キリスト教文化から距離のある場においてこそ可能だったのかもしれない。

内容に踏み込んだ評価をするなら、本論文は、いくつかの方面にわたる著者の力量が遺憾なく発揮されている。一つは、第二部に明瞭に現れているが、新約聖書学の伝統的蓄積に著者が通暁していることである。教典論の視点から福音書や書簡を見直すといっても、それは歴史的・批判的聖書学のこれまでの蓄積をひとまず踏まえることなしにはなしえない。著者は十分にそれをなした上で自説を展開しているのである。第二に、聖書学に持ち込まれた諸理論を、著者は逐一組織的に研究し、摂取している。構造主義、H・C・キーの社会史的パースペクティブ、シュッツやバーガーの現象学的社会学、タイセンらの文学社会学、レトリック批評、H・R・ヤウスや W・イーザーによって代表され受容美学とか美的作用理論などと呼ばれる文学理論がそれである。さらに、ファンダメンタリズムとグ

ローバリゼーションに関する議論では、I・ウォーラーステイン、J・W・マイヤー、R・ロバートソン、N・ルーマンらによる社会科学の成果が周到に参照され取り入れられている。ブルトマンを取り上げた第三部においても、ブルトマンのほぼ全著作を視野に収めつつ、彼が深い影響を受けたハイデガーの思想が検討される。議論が展開される際に著者が踏まえ、用いる思想的素材の広さとそれらに対する理解の深さには驚かされる。

本論文は、野心的・先駆的な試みであるだけに、得られた成果はいずれも斬新である。しかし当然その裏面として、提示された諸結論は、蓋然性が最も高いと合理的に判断されうることは認められても、依然として試論という性格を拭い切れてはいない。さらにまた、宗教のいとなみにおける教典の意義と機能を探るという教典論の広大な課題全体を展望するならば、著者が今回成し遂げた成果はその一部でしかない。とはいえ、本論文が驚くほど広範な領域にまたがる成果であることには疑問の余地がない。

何を問題とするかという問題意識の斬新さ、練り上げられた周到な方法論的考察、西洋の古典語にも近代語にも通曉しつつ幅広く一次・二次資料に丹念に当たる基礎作業、このほか種々の点から見て、本論文は宗教学的教典研究として極めてレベルの高い成果であり、学会に裨益するところ大であると認められる。よって審査委員会は全員一致にて、本論文の著者、土屋博氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。